

「12人の弟子を選ぶ」

2021年11月17日

イエスが山に登って、これと思う人々を呼び寄せられると、彼らは御もとに来了。そこで、十二人を任命し、使徒と名付けられた。彼らを自分のそばに置くため、また、宣教に遣わし、悪霊を追い出す権能を持たせるためであった。こうして十二人を任命された。(マルコ福音書3章13節～16節a)

主イエスは山に登られた。イスラエル人は、海は制御できない混沌と恐れ、山は神が臨在する聖なる場と受け止めていた。主イエスはガリラヤ湖畔から、聖なる山に登られた。そして、「これと思う人々を呼び寄せられると、彼らは御もとに来了。そこで、十二人を任命し、使徒と名付けられた。」「これと思う人々」とは、どんな判断基準だったのであろうか。主イエスの弟子になった12人を見ると、権力を持つ者、裕福な者、学識のある者はおらず、どこにでもいるガリラヤの民衆である。主イエスは12人を任命し、使徒と名付けた。「使徒」はギリシア語のアポストロスで、遣わされた者という意味である。使徒という言葉は、初代教会において使われ、ナザレのイエスに従った彼らは「弟子」と言われている。マルコ福音書の著者は、主イエスに呼び出された時から、既に、遣われた「使徒」の召命を受けた者を見なしている。

弟子にした人数の12は、イスラエル12部族と言われるように、完全を象徴する数字である。主イエスは12人からなる弟子の群れを形成された。召し出した理由は、まず、「自分のそばに置く」ためであった。主イエスの近くにおいて、主イエスが示される福音を直に見聞きし、神の業を体験するためである。これが、最も大きな理由であったらう。弟子たちは主イエスのそばにおいて、神の人間への愛を受け止めていった。二つ目の理由は「宣教に遣わす」ためである。愛と正義は見失われ、混迷したガリラヤの地で、神は生きて働き、「生きよ」と導いておられる恵みと祝福を宣べ伝えることである。そして、その恵みと祝福の証しとして、「病を癒し、悪霊を追い出す権能」を与えられた。主イエスの宣教団は喜びに満ち、苦しみ、悲しむ人々を取り込んでいった。

著者は、12弟子の名をあげている。まず、ガリラヤ湖の漁師であったシモン、彼は主イエスから「ペトロ(岩)」という名を付けられた。12弟子を代表する、自他共に認める第一の弟子である。血の気が多く、律儀で、愛すべき人物である。ゼベダイ家の息子ヤコブ、ヨハネ兄弟は、野心家で気性が激しく「ボアネルゲス・雷の子」と言われた。アンデレはペトロの弟で、真っ直ぐに受け止め、真っ直ぐに表す、素朴で素直な人物である。フィリポは状況を的確に判断できる理性的な人物である。彼はアンデレとは対照的で、二人は気が合った仲良しであった。バルトロマイとアルファイの子ヤコブについては、福音書の中に、記述はない。マタイはマタイ福音書では「徴税人」と書かれている。マルコ福音書では、徴税人レビが主イエスに召し出されている。マタイとレビは同一人物ではないか。トマスはヨハネ福音書に3回、登場している。目に見たものしか信じないリアリストである。タダイは、ルカ福音書にはタダイではなく、コヤブの子ユダとなっている。熱心党のシモンは、ローマ支配に反抗する熱狂的な愛国主義者である。ローマの手先の徴税人マタイとは真逆な立場であった。イスカリオテのユダは、主イエスをエルサレム神殿当局に引き渡した。彼らは、ユダを除き、政治的、経済的、宗教的に抑圧、収奪されていたガリラヤの無学な普通の人たちで、主イエスの弟子であることを喜び、懸命に従ったのである。